

6 線積分と面積分

6.1 スカラー場の線積分

曲線 C が、 $\mathbf{r} = (x(t), y(t), z(t)) : (a \leq t \leq b)$ で与えられているとします。このとき、スカラー場の関数 $f(x(t), y(t), z(t))$ に対して、

$$\int_C f dt = \int_a^b f(x(t), y(t), z(t)) dt \quad (6.1)$$

を、曲線 C に沿ったスカラー場の線積分といいます。 x 軸上の線分に沿った線積分である通常の 1 変数関数の積分の一般化だと言えます。 C を積分路といいます。特に C の始点と終点が一致しているとき、 C を閉曲線といい、 $\int_C f dt$ を $\oint_C f dt$ と書いて閉積分といいます。 C が曲線 C_1 と C_2 をつなげたものであるとき、 $\int_C f dt = \int_{C_1} f dt + \int_{C_2} f dt$ が成り立ちます。また、曲線 C は向きも考えたものでないといけません。(6.1) の C は、 t が a から b まで動いてできる曲線です。逆に、 b から a まで動いてできる曲線を $-C$ と書きます。 $\int_C f dt = -\int_{-C} f dt$ が成り立ちます。以下、曲線の向きは与えられた媒介変数が増加してできる向きとします。

(例 1) $\int_C xy^3 dt$ 、 $C : y = 2x$ ($-1 \leq x \leq 1$) を求めます。

C をベクトル方程式にすると $\mathbf{r} = (t, 2t) : (-1 \leq t \leq 1)$ なので、

$$\int_C xy^3 dt = \int_{-1}^1 t(2t)^3 dt = \frac{16}{5}$$

弧長 s による積分が求められる場合もあります。 ds は線素です。(4.3 節)

(例 2) $\int_C xy^3 ds$ 、 $C : y = 2x$ ($-1 \leq x \leq 1$) を求めます。

$\mathbf{r} = (t, 2t) : (-1 \leq t \leq 1)$ 、また、(4.7) より、 $\frac{ds}{dt} = \left| \frac{d\mathbf{r}}{dt} \right| = \sqrt{5}$
よって、

$$\int_C xy^3 ds = \int_{-1}^1 t(2t)^3 \frac{ds}{dt} dt = \frac{16}{\sqrt{5}}$$

同じ積分路 C に沿った線積分の和 $\int_C f dx + \int_C g dy + \int_C h dz$ を簡略して、 $\int_C [f dx + g dy + h dz]$ と書きます。

(例 3) $\int_C [xyz dx + (x + y + z) dy + (x^2 y + z) dz]$ 、 $C : y = 2x$ ($z = 2, -1 \leq x \leq 1$) を求めます。

$\mathbf{r} = (t, 2t, 2) : (-1 \leq t \leq 1)$ 、また、 $dx = dt$ 、 $dy = 2dt$ 、 $dz = 0$ より、

$$\begin{aligned} \int_C [xyz dx + (x + y + z) dy + (x^2 y + z) dz] &= \int_{-1}^1 [t(2t)2dt + (t + 2t + 2)(2dt)] \\ &= \int_{-1}^1 4t^2 dt + 2 \int_{-1}^1 (3t + 2) dt = \frac{32}{3} \end{aligned}$$

6.2 ベクトル場の線積分

曲線 C が弧長 s を媒介変数として $\mathbf{r} = (x(s), y(s), z(s))$ で与えられているとします。このとき、ベクトル場の関数 $\mathbf{A} = (A_x(s), A_y(s), A_z(s))$ に対して

$$\int_C \mathbf{A} \cdot \mathbf{t} ds \quad (6.2)$$

を、曲線 C に沿ったベクトル場の線積分といいます。 t は、 r の単位接線ベクトルです。(4.3 節) $A \cdot t$ は、 A の、 r の接線方向の成分です。(4.9) より $t ds = dr$ なので、

$$\int_C A \cdot t ds = \int_C A \cdot dr \quad (6.3)$$

$$= \int_C [A_x dx + A_y dy + A_z dz] \quad (6.4)$$

$$= \int_C \left[A_x \frac{dx}{ds} + A_y \frac{dy}{ds} + A_z \frac{dz}{ds} \right] ds \quad (6.5)$$

(6.4) は例 3 の問題と同じ形をしています。結局、スカラー場の線積分と同じ計算をすることになります。

(例 4) $A = (xy, x + y)$ として、 $\int_C A \cdot t ds$ 、 $C : y = x^2$ ($-1 \leq x \leq 1$) を求めます。

$$\begin{aligned} \int_C A \cdot t ds &= \int_C A \cdot dr \\ &= \int_{-1}^1 [xy dx + (x + y) dy] \\ &= \int_{-1}^1 xx^2 dx + \int_{-1}^1 (x + x^2)(2x dx) = \frac{4}{3} \end{aligned}$$

(例 5) 質量 m の物体が力 F を受けて、軌道 C を描いて運動しているとします。このとき、 F が物体にする仕事を求めましょう。

仕事 W は、力の変位方向の成分と距離の積で与えられます。すなわち、 $\Delta W = F \cdot t \Delta s$ です。したがって、 $W = \int_C F \cdot t ds$ となります。時間を t 、速度を v とすると、

$$\begin{aligned} w &= \int_C F \cdot dr = \int_{t_0}^t F \cdot \frac{dr}{dt} dt = \int_{t_0}^t F \cdot v dt = \int_{t_0}^t m \frac{dv}{dt} \cdot v dt \\ &= \int_{t_0}^t \frac{d}{dt} \left(\frac{m}{2} v \cdot v \right) dt = \frac{m}{2} \int_{t_0}^t \frac{d}{dt} (|v|^2) dt = \frac{m}{2} (v^2(t) - v^2(t_0)) \end{aligned}$$

仕事は、 C の端点での運動エネルギーの差で与えられることが分かりました。

6.3 グリーンの定理

xy 平面で、単一閉曲線 C (自分自身と交わらない閉曲線) に囲まれた領域を R とします。 C は、進行方向に対して R が常に左側にあるような向きとします。このとき、関数 f 、 g に対して、

$$\iint_R \left(\frac{\partial g}{\partial x} - \frac{\partial f}{\partial y} \right) dx dy = \int_C (f dx + g dy) \quad (6.6)$$

が成り立ちます。これをグリーンの定理といいます。線積分と 2 重積分を変換する定理です。

図のような単純な図形について成り立つことを証明します。 C を上半分と下半分に分け、それぞれ $C_1 : y = u(x)$ 、($a \leq x \leq b$)、 $C_2 : y = v(x)$ 、($a \leq x \leq b$) とします。すると、

$$\begin{aligned} \iint_R \frac{\partial f(x, y)}{\partial y} dx dy &= \int_a^b dx \int_{v(x)}^{u(x)} \frac{\partial f(x, y)}{\partial y} dy = \int_a^b [f(x, u(x)) - f(x, v(x))] \\ &= \int_{C_1} f(x, u(x)) dx - \int_{C_2} f(x, v(x)) dx \\ &= - \left(\int_{-C_1} f(x, u(x)) dx + \int_{C_2} f(x, v(x)) dx \right) = - \int_C f(x, y) dx \end{aligned}$$

$\iint_R \frac{\partial g}{\partial x} dx dy$ についても同様の計算をすれば (6.6) が得られます。

(例6) $\int_C (ydx - 2xdy)$ を求めます。C は単位円周上を点 (0, 1) から反時計周りに 1 回転するものとします。

素直に計算すると、 $x = \cos \theta$ 、 $y = \sin \theta$ とおいて、

$$\int_C (ydx - 2xdy) = \int_0^{2\pi} (-\sin^2 \theta d\theta + 2 \cos^2 \theta d\theta) = \int_0^{2\pi} \left(\frac{3}{2} \cos 2\theta + \frac{1}{2}\right) = \pi$$

となります。グリーンの定理を適用してみましょう。

$$\int_C (ydx - 2xdy) = \iint_R \left(\frac{\partial}{\partial x} 2x - \frac{\partial}{\partial y} y\right) dxdy = \iint_R dxdy$$

これは単位円の面積なので π となります。

R の面積を S とします。(6.6) において、 $f = 0$ 、 $g = x$ とおくと $S = \iint_R dxdy = \int_C xdy$ 、 $f = -y$ 、 $g = 0$ とおくと、 $S = \iint_R dxdy = -\int_C xdy$ となります。これらより、

$$S = \frac{1}{2} \int_C (xdy - ydx) \tag{6.7}$$

(例7) カージオイド $r = a(1 - \cos \theta)$ の面積を求めます。

$x = r \cos \theta$ 、 $y = r \sin \theta$ とおくと、(6.7) は、

$$\begin{aligned} A &= \frac{1}{2} \int_C r \cos \theta (\sin \theta dr + r \cos \theta d\theta) - \frac{1}{2} \int_C r \sin \theta (\cos \theta dr - r \sin \theta d\theta) \\ &= \frac{1}{2} \int_C r^2 d\theta = \frac{1}{2} \int_0^{2\pi} a^2 (1 - \cos \theta)^2 d\theta = \frac{3\pi}{2} a^2 \end{aligned}$$

グリーンの定理を別の形で表してみます。 $v = (g, -f)$ とおくと、

$$\iint_R \left(\frac{\partial g}{\partial x} - \frac{\partial f}{\partial y}\right) dxdy = \iint_R \operatorname{div} v dxdy$$

また、

$$\int_C (f dx + g dy) = \int_C \left(f \frac{dx}{ds} + g \frac{dy}{ds}\right) ds = \int_C (g, -f) \cdot \left(\frac{dy}{ds}, -\frac{dx}{ds}\right) ds$$

ここで、C を表す方程式 r の単位接線ベクトルは $\left(\frac{dx}{ds}, \frac{dy}{ds}\right)$ です。 $\left(\frac{dx}{ds}, \frac{dy}{ds}\right) \cdot \left(\frac{dy}{ds}, -\frac{dx}{ds}\right) = 0$ より、 $\left(\frac{dy}{ds}, -\frac{dx}{ds}\right)$ は r の単位法線ベクトル n です。すなわち、

$$\iint_R \nabla \cdot v dxdy = \int_C v \cdot n ds \tag{6.8}$$

6.4 スカラー場の面積分

曲面 S の方程式が $r = r(u, v)$ で与えられているとします。このとき、スカラー場の関数 $f(x, y, z)$ に対して、 $\iint_S f dS$ を、S 上でのスカラー場 f の面積分といいます。dS は面積素です。(4.16) より、

$$\iint_S f dS = \iint_S f \left| \frac{\partial r}{\partial u} \times \frac{\partial r}{\partial v} \right| dudv \tag{6.9}$$

となり、通常の 2 重積分に帰着できます。面積分は、xy 平面上での面積分である 2 重積分の一般化だといえます。

(例8) $\iint_S (x + y + z) dS$ 、 $S : x^2 + y^2 = 1, 0 \leq z \leq 1$ を求めます。

S は、 $\mathbf{r} = (\cos \theta, \sin \theta, z)$ とおけます。 $\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \theta} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial z} = (-\sin \theta, \cos \theta, 0) \times (0, 0, 1) = (\cos \theta, \sin \theta, 0)$ なので、

$$\begin{aligned} \iint_S (x + y + z) dS &= \iint_S (\cos \theta + \sin \theta + z) \cdot 1 d\theta dz \\ &= \int_0^{2\pi} d\theta \int_0^1 (\cos \theta + \sin \theta + z) dz = \int_0^{2\pi} (\cos \theta + \sin \theta + \frac{1}{2}) d\theta = \pi \end{aligned}$$

6.5 ベクトル場の面積分

曲面 S の方程式が $\mathbf{r} = \mathbf{r}(u, v)$ で与えられているとします。このとき、ベクトル場の関数 $\mathbf{A}(A_x, A_y, A_z)$ に対して、 $\iint_S \mathbf{A} \cdot d\mathbf{S}$ を、 S 上でのベクトル場 \mathbf{A} の面積分といいます。 $d\mathbf{S}$ はベクトル面積素です。

(4.19) より、

$$\iint_S \mathbf{A} \cdot d\mathbf{S} = \iint_S \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} dS = \pm \iint_S \mathbf{A} \cdot \left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right) dudv \quad (6.10)$$

\mathbf{n} には2つの向きがあることに注意しましょう。

(例9) 例8の S に対して、 $\iint_S (x, y, z) \cdot d\mathbf{S}$ を求めます。ただし、 \mathbf{n} は内側から外側に向かう向きとします。

$$\iint_S (x, y, z) \cdot d\mathbf{S} = \iint_S (\cos \theta, \sin \theta, z) \cdot (\cos \theta, \sin \theta, 0) dz d\theta = \int_0^{2\pi} d\theta \int_0^1 dz = 2\pi$$

\mathbf{n} と x, y, z 軸がなす角をそれぞれ α, β, γ とすると、 $\mathbf{n} = (\cos \alpha, \cos \beta, \cos \gamma)$ と表せます。ここで、(4.16)、(4.18) より、 $\left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right)$ の x 成分を $\left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right)_x$ として、

$$\cos \alpha = \frac{\left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right)_x}{\left| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right|} = \left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right)_x \frac{dudv}{dS}$$

$\mathbf{r} = (f(y, z), y, z)$ と表すと、

$$\begin{aligned} dS \cos \alpha &= \left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial y} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial z} \right)_x dydz \\ &= \left(\left(\frac{\partial f}{\partial y}, 1, 0 \right) \times \left(\frac{\partial f}{\partial z}, 0, 1 \right) \right)_x dydz \\ &= dydz \end{aligned} \quad (6.11)$$

これは、曲面上の微小面積 dS の yz 平面への正射影が $dydz$ となることを表しています。

同様に $dS \cos \beta = dzdx$ 、 $dS \cos \gamma = dxdy$ が成り立つので (6.10) は、

$$\begin{aligned} \iint_S \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} dS &= \iint_S (A_x \cos \alpha + A_y \cos \beta + A_z \cos \gamma) dS \\ &= \iint_S (A_x dydz + A_y dzdx + A_z dxdy) \end{aligned} \quad (6.12)$$

となります。

(例10) (6.12) を用いて例9を解きます。

$$\iint_S (x, y, z) \cdot d\mathbf{S} = \iint_S x dydz + y dzdx + z dxdy$$

(2.6) を用いて $x = \cos \theta$ 、 $y = \sin \theta$ 、 $z = z$ と変数変換すると、 $dydz = \cos \theta d\theta dz$ 、 $dzdx = \sin \theta d\theta dz$ 、 $dxdy = 0 \cdot d\theta dz$ より、

$$\iint_S x dydz + y dzdx + z dxdy = \iint_S \cos^2 \theta d\theta dz + \sin^2 \theta d\theta dz = \int_0^{2\pi} d\theta \int_0^1 dz$$

6.6 ガウスの発散定理

(5.2) 節を見てください。 $v_x(x, y, z)dydz$ は、微小長方形上での v の面積分です。すなわち、 S を微小直方体の表面とすると、 $\iint_S \mathbf{v} \cdot d\mathbf{S} = \nabla \cdot \mathbf{v} dx dy dz$ です。一般の閉曲面 S と、それに囲まれた領域 V を考えます。 V を細かく分割して微小直方体に分けて、それぞれの直方体の表面 S_i について面積分を行うと、 $\sum_i \iint_{S_i} \mathbf{v} \cdot d\mathbf{S}_i = \sum_i \nabla \cdot \mathbf{v} dx dy dz$ となります。隣り合う直方体の共通の面上での面積分は、 n の符号が逆なだけで打ち消しあって 0 になります。よって打ち消しあう相手のない面、すなわち曲面 S 上の面積分だけが残って、 $\sum_i \iint_{S_i} \mathbf{v} \cdot d\mathbf{S}_i = \iint_S \mathbf{v} \cdot d\mathbf{S}$ となります。以上より、ガウスの発散定理

$$\int_S \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} dS = \int_V \nabla \cdot \mathbf{A} dV \quad (6.13)$$

が導かれました。 \iiint_V を \int_V 、 $dx dy dz$ を dV と書いています。この定理を用いて面積分を 3 重積分に変換することで計算が楽になる場合があります。

6.7 ストークスの定理

(5.3) 節を見てください。 $F_x(x, y)dx$ は、微小長方形のひとつの辺上での線積分ですので、 C を微小長方形の周辺とすると $\int_C \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = \nabla \times \mathbf{F} dx dy$ となります。 xy 平面上の一般の閉曲線 C とそれに囲まれた領域 S に対して (6.13) の証明と同様の手法を取ると、2次元のストークスの定理

$$\int_C \mathbf{A} \cdot \mathbf{t} ds = \int_S \nabla \times \mathbf{A} dS \quad (6.14)$$

が導かれます。 \iint_S を \int_S 、 $dx dy$ を dS と書きました。証明は省略しますが、3次元の曲線 C に対しても (6.14) は成り立ちます。この定理を用いて線積分を 2 重積分に変換することで計算が楽になる場合があります。

(6.8)、(6.13)、(6.14) を比べてみましょう。

$$\begin{aligned} \int_C \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} ds &= \int_S \nabla \cdot \mathbf{A} dS \\ \int_S \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} dS &= \int_V \nabla \cdot \mathbf{A} dV \\ \int_C \mathbf{A} \cdot \mathbf{t} ds &= \int_S \nabla \times \mathbf{A} dS \end{aligned}$$

数学の美しさのひとつとしてよく取り上げられます。